

中国の飛躍的台頭の下で

世界 鼓動

田中 均

で、同盟国に支えられた米国の前方展開は有効に機能した。近年の中国の飛躍的台頭は、米中の戦略のぶつかり合いを生む。

中国は、軍事能力拡大に支えられた海洋軍事戦略により、米国の海空軍の接近を遠ざける戦略を取り入れていると伝えられる。これに対して米国は「アジアへの回帰(pivot)」と総称される行動をとっている。米国は尖閣問題や南シナ海問題に關与する姿勢を示したほか、東アジアサミットに参加し、経済的にも環太平洋パートナーシップ協定(TPP)を梃子としてアジアへの關与を拡大する構えである。軍事的には海兵隊

先日、マレーシアで開かれたアジア・パシフィック・ラウンドテーブルに参加した。東南アジア諸国連合(ASEAN)諸国の国際戦略研究所が主催し、25年の長きにわたり続いている有識者会合である。例年参加しているが、今回は特に強い印象を持った。欧州・米国・日本の経済的停滞に比し中国・インド・ASEAN諸国の経済的伸長は目覚ましいが、一方において東アジア地域の秩序は重大な過渡期にさしかかっている。

従来、米国と日韓豪などの民主主義先進国との同盟関係が、地域安定の基盤的役割を果たしてきた。中台危機や北朝鮮危機、あるいは大量破壊兵器拡散やテロ、自然災害といった脅威にいたるま

戦略の能動的な選択を

の豪州への配置やシンガポールへの戦艦の配備、さらにはベトナムやフィリピンとの軍事的関係の強化など、東アジア地域の安全保障パートナーシップを強化してきている。中国はこの動きを「中国封じ込め」とであると捉えている。

米中の相互依存関係は拡大しており、全面的に対決する事態には

ならないだろうが、戦略的対峙は続いていく。ASEAN諸国もこのような米中の戦略的対峙の影響を受け、国益が錯綜し、結果的には統合とは反対の方へ向きは始めている感もある。

対中政策の難しさは、経済的には大きな相互依存関係にある一方、共産党一党体制の将来が不透

明であり、脅威たり得るという二律背反性にある。従って対中政策は「ヘッジング(抑止と牽制)」とエンゲージメント(関与)の正しいバランスを維持していくというところに尽きるのだろう。地域最大の先進国日本の役割は、このバランスをうまく作っていくことにある。一方において日米安保体制

に基づく日本の役割を拡大していく必要があるし、また、この地域で高いレベルの経済貿易ルールを確保するため、日本がTPPに加入することの戦略的意味はきわめて大きい。同時に日本は中国を關与させる政策を強化していくべきである。日中韓経済連携を早急に交渉し、ASEAN+6の地域経済連携協定に繋げていくこと、さらには日米中の三者の枠組みを構築し、軍事的信頼醸成措置(例えば軍事予算の透明性担保、自然災害への共同行動など)を実現していくことである。

近代において日本は2度、戦略の大転換を余儀なくされた。黒船来航は米国が中国との交易に日本の港を必要としていたという背景があるが、その後、時を経ずして日本は富国強兵という大戦略に向かった。太平洋戦争も日本が中国大陸に戦線を拡大していったことが背景にあるが、敗戦により日本は軽武装経済再建を選択した。過去の日本の大戦略は米国並びに中国との関係を契機としながら展開していったと言っても過言ではない。中国の飛躍的台頭の下で日本はどういう戦略を選択するのか。過去とは異なり、日本自身の判断の下で選択し、行動していくということなのである。

(たなか・ひとし 日本総研国際戦略研究所理事長)



画・onyx